従って、乙期の一期（昭和十五年六月、予科練入隊、以後は予科の文字を略す）を飛練の第一期とし、丙飛の一期（十五年十月入隊）は飛練の第十一期となった。

甲飛九期（十六年十月、入隊）は私達丙飛十四期（十七年十一月入隊）と共に飛練は第三十期の同期となった。鹿島空の入隊式では、司令より同時に任命を受けた。丙飛十七期の飛練第三十三期で以降は、新採用の乙飛（特）一期（昭和十八年四月入隊）は、続いて飛練の第三十四期。甲飛十一期（十七年十月三重空入隊）と乙飛（特）二期（十八年六月入隊）は飛練第三十五期。同甲飛十一期の土浦空へ入隊者は飛練三十六期。甲飛十二期（十八年四・六・八月入隊）と乙飛十七期（昭和十六年十二月、入隊）、乙飛（特）三期（十八年八月入隊）は共に飛練第三十七期となり、甲飛十三期前期、乙飛（特）四期は飛練の第三十八期となった。

飛練第三十八期の頃より、戦局は有利な要因もなく、練習生は練習機に搭乗する機会もなく、一部は水中特攻要員などに配属された。これらは「翼なき飛行練習生」と呼ばれた。

資料では、甲飛の十三万九千人。乙飛の八万七千人余。丙飛の七千七百人。特乙飛は六千八百人余の約二十四万人余にわたる予科練出身者は、若くして海軍の搭乗員となり、その多くは特攻隊員としてその命を惜しむことなく、大空で痛恨の闘いを続けてきたのである。

戦争の悲劇
戦った人々の現在

山形県　石川　吉四郎

大正十五（一九二六）年十二月、寅年生まれ、山形県長井町尋常高等小学校卒業後、昭和十五（一九四〇）年四月、東京市武蔵野工業学校に入学しました。同十六年三月十日に昼食を終わり、

春の日和に外は上天気になり、日向ぼっこをしながら休んでいましたところ、東の空より爆音がする。連呼して空を見上げると、見たこともない飛行機が編隊を組んで高度約五千メートル位で東京湾方面から侵入して来ました。

後で情報が入ったところによりますと、アメリカの飛行機（双発のＢ25軽爆機）だったそうで、私の目で確認しました。約十機編隊位で第一回の東京偵察ということでした。その後何回となく来て、第二回、第三回と飛んだ回数を増し、その年に軍部の命令にて緊急に学徒動員がありました。

日本製鋼所へ派遣させられ、軍需工場へと短期間の見習にて旋盤工となり、戦車製造の方へ廻されました。毎日々々戦車の車輪作りに捧げたものでした。日曜日の休日に街へ外出して歩いて見ると、やはり眼につくのが「陸軍志願兵募集、何年生まれ」また「海軍少年航空兵募集」年に制限があり、また海軍志願兵募集の公告のビラが貼ってあるのが目立ったものです。

この年の昭和十六年十二月八日、とうとう忘れられない日が遂にやって来たのであります。私の同年兵が真珠湾攻撃が始まって帰らぬ人となったのです。それが九人の軍神で、靖国神社に祀られておられますが、その時点で戦争が長期化になるような気配もありました。

私も十七年に試験場が三鷹であったような記憶があります。海軍を志願し、天皇陛下の御為、御国の為に滅死奉公ができるなら、一人でも五体満足してるなら、誰しもが自分の住んでいる国を愛さない人はあり得ない筈である。

そして、東京にて海軍志願で受験して、衣笠の第二武山海兵団へ入団しました。新兵教育も終了し、横須賀の海軍工機学校を生徒代表として卒業、左腕に桜のマーク（卒業の証明）を戴き、先任上等兵となりました。その後、横須賀の海兵団に戻りましたが、また直ぐに茨城県の谷田部海軍航空隊付に命ぜられ約一カ月間位滞在、その後、

鎮守府より赤札の命令書が届いて、直ちに横浜港沖に停泊している二等巡洋艦「五十鈴」乗員を命ぜられ、直ちに乗艦し出港しました。

いよいよ大海原へと、東シナ海へ、東へ東へと右前方に一隻、右後方に一隻、左前方に一隻、左後方に一隻と、左右に四隻の海防艦を付けて警戒にあたり、我が巡洋艦「五十鈴」は旗艦（先頭）になって、ラバウル、シンガポールの激戦地に向かって戦い、また移動して、トラック島に向け直行する。

途中から、アメリカ軍艦と空からの敵攻撃機と遭遇、我が艦よりも、どんどん砲弾を飛ばすが一向に届かず、我が艦だけが右舷側、左舷側の鉄板（外壁）に銃弾で穴、或いは甲板（デッキ）に敵弾の穴等が沢山開けられていました。

甲板におられた兵科の士官、兵が次々と機銃掃射を受け、帰らぬ人となられ毛布に包んで合掌して海中へと、初めての水葬で、本当に心が痛みました。また、次第に退いて、フィリピンのマニラ等、また、サイパン島、グァム島・テニアン島では朝早くから日が暮れるまで、アメリカの攻撃機の攻撃また攻撃を受けながら沈まないで戦ってきたのです。それに私は機関兵でしたから船底に何時間もいるので、甲板よりの伝声管で連絡を受けたり、したりだけで、上の様子は見ることができませんでしたが、状況は知ることができました。

そして「香港島へ上陸」との命令で上陸した時には上等下士官より、機関兵は「人間魚雷艇に乗るんだ」と命令されました。私の知っている方で、上等兵曹の田畠さんという方が、敵の軍艦に体当たりしました。敵艦は平気で沈みませんでしたが、田畠さんは戦死してしまいました。

私は命令を受け人間魚雷に乗り込むべく待機して覚悟をして順番を待っていましたが、魚雷艇を積んだ輸送船が途中で沈没し、乗るべき魚雷艇が到着せず、待機待ちで終わった次第です。人の幸・不幸と生死は、このようにして変化したのでした。

私も真珠湾攻撃した方と同じく特攻隊の一員です。今では、戦没者に対する悲しみでいっぱいです。我々や戦没者のことを心豊かにし、よく理解して頂きたい。戦争というものは危険地域勤務の者も、そこから逃げることもできないし、艦隊勤務の者も当然、海へ逃亡することができません。

我々軍人として、召集、採用された者は、途中で投げ出されており、このようにされて気持ちのいい方はおられませんでしょう、この償いは誰が、いつしてくれるのでしょうか。

最初の恩欠者は全国で二百万といわれておりますが、毎年一〇%位ずつ減っていると聞きます。一刻も早く救済して下さるよう望みます。

海軍戦記
「ラバウルでの戦火」

愛媛県　渡　辺　福　松

私は大正十五（一九二六）年三月一日生まれです。昭和十六（一九四一）年、大東亜戦争の始まる前ですが、既に支那事変（日中戦争）は長く続き、太平洋の雲行の怪しくなってきた頃です。私は、昭和十六年八月一日から愛媛航空機乗員養成所の職員として勤務中でしたが、軍国日本の若者として一日も早く志願せねばという気概から、昭和十八年三月、同所を退職して、四月に志願兵として佐世保第二海兵団に入団しました。

当時、私の家族は両親と兄・姉がおり、私は次男で、家業は農業でした。

入団以来約二カ年、海軍の厳しい訓練に明け暮